

## ◆地域活動

# 羽地地区におけるヒトエグサ養殖適地試験

牧野清人

### 1. 目的

ヒトエグサ養殖は主に恩納村、北中城村等で取り組まれている。近年ヒトエグサの需要は県内外で高まりつつあり、今後生産量の増大が求められるため、平成20年の漁業権の更新において養殖漁場の拡大が見込まれる。ヒトエグサの養殖を行うためにはその生育条件にあった漁場の選定調査が必要不可欠であることから、本試験では、漁業権更新時にヒトエグサ養殖漁場の取得を行うことを見込み、名護市仲尾地先及び饒平名地先において養殖試験を実施し、養殖場としての適性について検討した。

### 2. 材料及び方法

#### (1) 採苗試験

18年10月20日から12月20日にかけて羽地内海の南側に位置する名護市仲尾地先及び北側の饒平名地先において、採苗の可否について調査を行った。昨年度事業で行った区域内に5分鉄筋を打ち込み、昨年度試験結果を参考に底面から20cmの高さに中古のモズク網(網の品質は特定していない)を張った。種の付着が確認されるまでの期間、網の洗浄や雑藻の除去などは行わなかった。

#### (2) 本張り養殖試験

名護市饒平名地先において18年12月20日～19年1月20日にかけて、種の付き具合をみて本張りを行い、生育状況及び収穫量等について検討した。

### 3. 経過及び結果

#### (1) 採苗試験

平成18年12月1日～20日の間に2カ所の試験漁場にて種の付着状況を観察した。

仲尾においては写真1のように網を張った。今回は昨年護岸の種が付いていた高さに合わせて、護岸から沖側に約10m離して設置した。この結果、鉄筋の20cm～30cmの高さに種の付着が観察され、網にも多くの付着が見られた。

一方、饒平名地先写真2では、昨年同様20cmの高さに網を張ったが、種の付着状況は網によって異なり、良く付いているものは昨年同様網全体に満遍なく付着しているのが観察されたが、そうでないものは網目の半分近い面積に泥などが付着しており、それが種の付着を妨げているものと思われた。この現場は雨水などが排水溝から流れ込む場所で、網を張ってから種の付着が確認されるまでの間に、悪天候のため大量の赤土の流出があり、それが網に付着したものと考えられる。

#### (2) 本張り養殖試験

平成18年3月10日～3月30日の間に名護市饒平名地先において収穫を行った。仲尾地先は業務を依頼した漁業者の都合により本張りが出来なかった。収穫は干潮時に合わせて網が干上がり次第、全て手摘みで行った。収穫したヒトエグサはその場で海水で手洗いし、水切りをして持ち帰り、洗濯用の脱水機で脱水した後、重量を測定した。脱水後の湿重量は、総重量が110kg、網1枚につき約10kgで、昨年より若干少なめであった。今回は100枚近く網を張ったものの、収量が昨年度より少なかったが、原因として種付けの時期に網の手入れをしなかったために泥の付着により網によって収穫量に差が出たことと、生産者の中で収穫するタイミングを逃してしまった方がおり、収穫できた網が全体の3分の1以

下にとどまってしまったことによる。こういった問題が解決されれば昨年以上の収穫量が予想される。今後の課題としては、第一に網の手入れを入念に行う必要があるということと、リボン網等を用いることにより、網への泥の付着を防ぎ、種の付着量を多くする必要がある。第二に、生産者のヒトエグサ養殖にかかるスケジュールを決定する必要がある。ヒトエグサ養殖を行う場合、生産者の兼業などと調整しながら行

う必要があるので、これについて今後始めようとする生産者には十分説明しなければならない。第三に、収穫方法と販売について、生産者に選択権を与える必要がある。手摘みなど、手間をかけた方法で収穫したヒトエグサと機械摘みしたもので品質の違いを業者に十分説明し、単価について交渉して生産者が作業効率や売り上げ等を考慮しながらどちらの方法で製品化し、販売するかを選択すべきである。



写真1. 仲尾地区における採苗の様子



写真2. 饒平名地区の漁場と採苗用に張られた網



写真図3. 饒平名地区において生育したヒトエグサの網



写真4. 泥の付着により、生育がまばらになった網

◆  
1. 自  
モニ  
ク  
等  
天  
年  
2.  
自  
養  
を  
し  
村  
し  
F  
合  
会  
村  
苗  
供  
験  
×1  
3.  
自  
(8  
付  
中  
共  
に  
整  
た。